氏　　名	羽生　敦子
学　位　の　種　類	博士（観光学）
報　告　番　号	甲第３７２号
学位授与年月日	２０１４年 3月３１日
学位授与の要件	学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学位論文題目	19 世紀フランスロマン主義作家の旅行記に見られる旅の主体の変遷
審　査　委　員	（主査）舛谷　鋭 安島　博幸 豊田　由貴夫 小倉　和子　（立教大学文学研究科教授）

Ⅰ　論文の構成と内容要旨

（１）論文の構成

第 1 章序論　……..p.1
第 1 節　研究の背景 ……..p.2
(1) フランスにおける旅の主体……..p.2
(2) アメリカにおける旅の主体 ……p.2
(3) 19 世紀における旅の主体…… p.3
第 2 節　研究の目的と方法…… p.8
(1) 研究の位置づけ…… p.8
(2) 研究の目的…… p.8
(3) 研究の手順…… p.9
(4) 研究の方法 ……p.10
第 3 節　論文の構成…… p.10
第 4 節　用語について……p.11
脚注 ……..p.12

第 2 章　旅行者とツーリスト(観光者)に関するディスクール …….. ..p.13
第 1 節「旅行者から観光者へ」の言説に関する研究史…… p.14
(1) フランスの研究史 ……..…p.14
(2) 20 世紀ブーアスティンを嚆矢とした旅行者と観光者に関する言説について p.15
(3) マキャーネルによる反論 ……p.16
(4) コーエンとスミス.V によるツーリストの分類…… p.18
(5) 日本における批判の諸相 ……p.19
第 2 節　フランス語文献における「ツーリスト」研究 ……p.20
(1) テーヌによる「19 世紀ツーリスト」の類型 ……p.21
(2) ユルバンの「ツーリスト」研究 ……..p.22
第 3 節　フランス語 Voyageur から Touriste への変遷について…… p.24
(1) フランス語 Voyageur と Touriste の辞書的定義 ……p.24
(2) ルソーの旅と Touriste ……p.25
(3) ルソーの旅とその影響 …… p.26
(4) イギリス人ツーリスト……..p.27
(5) フランス語における Touriste の定義 ……..p.28
(6) 文学作品の中の Touriste ……p.29
(7) Album とツーリスト(Touriste ,Tourist)について.....p.29

第 4 節 考察 …… p.30
脚注……..p.32

第 3 章　「旅行記」とは何か　……p.34
第 1 節　19 世紀の旅行記に関する先行研究 ……p.35
第 2 節　シュポー(1977)「小説の周縁を彷徨う旅行記について」……p.36
⑴ 旅行記のジャンルについて…… p.37
⑵ 旅行記の目的について ……...p.37
⑶ 旅行記と小説の接近について…… p.38
⑷ 旅行記の「文学性」について…… p.39
⑸ 旅行記の目的の多様性について…… p.40
⑹ 旅行記に与えられた新しいコンセプトについて…… p.41
⑺ 日記形式の旅行記について…… p.41
⑻ 第 2 節のまとめ ……p.42
⑼ 考察…… p.43
第 3 節　ル・ユナン(1987)「旅行記：文学界への内包」..... p.43
(1) 科学的言説と文学的言説について…….. p.43
(2) 叙述の変化 ……p.44
(3) 19 世紀の「旅行記」 ……p.45
(4) 考察 ……p.46
第 4 節　ユモリスティック旅行記 ……p.47
(1) サンスー(2001)「17 世紀から 19 世紀のユモリスティック旅行記について」
の概要.....p.47
(2) テーヌの『ピレネ旅行記』について p.50
(3) スターンの『センチメンタル・ジャーニー』について p.51
(4) グザヴィエ・ド・メーストルの『私の部屋周遊記(1794)について..... p.52
(5) ユモリスティック旅行記の下位分類 ……..p.53
(6) 新しい旅の主体：ツーリスト ……..p.54
(7) 生理学とツーリスト ……..p.54
第 5 節　サンスーの示す 19 世紀ユモリスティクな旅についての事例 p.57
(1) スタンダール『ある旅行者の手記』*Mémoire d'un Touriste* (1838) ……...p.57
(2) トップフェール『ジグザグ旅行記』*Voyage au zigzag* (1840) ……p.58
(3)　考察…… p.59
脚注…… p.61

第 4 章　作家の旅 p.64

第 1 節　「ロマン主義」について..... p.65
(1)ロマン主義以前の旅 p.65
(2)フランスにおけるロマン主義について..... p.67
(3)19 世紀ラルース大辞典 による定義 ……...p.69
(4) フランス絵画に見られるロマン主義 ……p.72
(5)ルソーとロマン主義 p.75
(6)フランスロマン主義の背景 p.78
第 2 節 19 世紀フランス文学者の旅について..... p.79
(1)19 世紀フランス人作家の旅の頻度について p.79
(2)オリエント旅行の系譜..... p.80
(3)旅しない作家について..... p.80
第 3 節　エクリヴァン・ヴォワイヤジュールについて…… p.82
脚注…… p.86

第 5 章　シャトーブリアンの旅 ……p.89
第 1 節　シャトーブリアンについての概要…… p.90
第 2 節　シャトーブリアンとロマン主義…… p.94
(1) サン・マロとコンブール…….. p.94
(2) 亡命 ……p.97
(3) ルソー…….. p.98
第 3 節　パリからエルサレムへの旅…… p.100
(1) 19 世紀オリエント旅行の背景について…… p.100
(2) 旅の目的 ……..p.102
(3)出版の理由 ……..p.104
(4)ギリシャの旅 …… p.105
（主要都市）
モドン p.106
コロン p.108
トリポリッザ p.110
ミシトラ p.110
アミクレ p.113
モレアス p.114
スパルタ p.114
アルゴス p.116
メガラ p.116
フォーベル宅（アテネの領事）p.119

(5)エルサレムの旅 ……..p.123
(6)エジプトの旅 ……p.130

第 4 節　考察 ……..p.135
脚注 ……p.139

第 6 章　スタンダールの旅 ……..p.142
第 1 節　スタンダールについての概要…… p.143
(1)生涯について ……p.143
(2)スタンダールと紀行文……P.145
第 2 節　スタンダールとロマン主義 ……p.146
(1)スタンダールと山 ……p.146
(2)スタンダール的ロマン主義 ……p.151
(3)スタンダールの英単語 ……p.153
第 3 節　スタンダールと旅 ……p.154
(1)ナポレオン遠征…… p.154
(2)スタンダールと故郷グルノーブル…… p.156
(3)スタンダールとイタリア ……p.158
第 4 節『ある旅行者の手記』*Mémoire d'un Touriste* について…… p.159
(1)あらすじ……p. 159
(2)出版にまつわる背景…… p.161
(3)タイトルについての諸相 ……...p.163
(4)新聞紙上に見られる『ある旅行者の手記』への反響 ……...p.165
(5)「鉄の商人」および「スタンダール」が使用した交通手段について ……p.168
第 5 節　旅を好んだ理由についての諸相 ……p.170
第 6 節　考察……..p.172
脚注 ……p174

第 7 章　フロベールの旅 ……p.178
第 1 節フロベールと旅の概要について…….. p.179
第 2 節『ブルターニュ紀行』について p.180
(1) 出発の理由について p.180
(2) ブルターニュについて p.181
(3)「旅行記」の方向性 p.183
第 3 節ブルターニュ旅行について p.184
(1) 旅の方法 p.184

(2)旅の態度（属性）について..... p.186
(3)旅の行程について..... p.187
(4)文学散歩..... p.187
(5) 19 世紀の都市観光..... p.191
(6)考察 p.195
第 4 節『エジプト旅行記』について.....p.196
(1) 出版の経緯 p.196
(2) 出発前 p.197
(3)交通手段について.....p.197
(4)旅の形態 p.201
(5)エジプト旅行のための準備と友人デュ・カンについて p.202
(6)エジプト観光 p.204
第 5 節　考察..... p.207
脚注 p.209

第 8 章　まとめと結論..... p.211
第 1 節各章のまとめ…… p.212
(1)第 2 章のまとめ…….... p.212
(2)第 3 章のまとめ ……..p.213
(3)第 4 章のまとめ ……...p.215
(4)第 5 章のまとめ ……..p.216
(5)第 6 章のまとめ ……..p.218
(6)第 7 章のまとめ……... p.220
第 2 節　「トラベラー対ツーリスト」に関する研究 ……..p.222
(1)フランスとアメリカの観光研究の違いについて…… p.222
(2)フランスにおけるツーリスト研究 ……...p.223
第 3 節　ロマン主義と作家の旅 ……p.224
(1) 作家の旅と楽しみの旅 ……p.224
(2) 現代に生きるロマン主義作家の旅 ……p.225
第 4 節　19 世紀，作家の旅の社会的背景…… p.225
第 5 節　作家の旅について……p.228
(1) 「旅の主体」としての考察.....p.228
(2) 社会・作品への影響 ……p.232
第 6 節　ツーリズムの萌芽について…….. p.235
(1) ガイドブックの視点から ……..p.236
(2) イギリス人ツーリストとイギリス……p.237

第 7 節　「ヴォワイヤージュ」の定義……..p.237
第 8 節　おわりに：「観光文学」の可能性 ……..p.238
脚注 ……p.240

（２）論文の内容要旨

１）論文の目的

19 世紀の旅は観光研究において、とりわけフランス近代観光を解明する上で重要である。多くの作家が旅をしていることから文学領域においても作家と旅に関する研究は想像以上に多い。そこでは旅から作家の内面性、感性を導き出すことが目的とされてきた。文学作品、ことに小説が、同時代の感覚を広く共有するものであることは言うまでもなく、事例とされた現在でも古典として絶えず参照される作家たちの作品は、現在においても旅や風景のまなざし方に規範を与えている。申請論文は、社会的背景や作家の行動を中心に分析し、19 世紀作家の旅を近代観光史の中に位置づけるとともに、観光領域における「文学」の有効性について、観光学の新たな切り口を示すものである。

２）各章の概要

第 1 章　序論

フランス語には「旅の主体」を表す名詞に Voyageur と Touriste があり Touriste にはネガティブな含蓄がある．英語のツーリストに関しては，ブーアスティンが『幻影の時代』*the Image*(1962)の中で 1960 年代における traveler 対 tourist の関係を示唆し英語ツーリストへの否定的側面を言及している．優位にある traveler とは 19 世紀以前の「旅の主体」である．フランスでは，ユルバンが「マス・ツーリズムによる Touriste への偏見ではない．ヨーロッパにおいては 19 世紀にすでに反 Touriste の考えはあった」(Urbain:2002;19)と言及する．19 世紀以前の旅，つまり「苦労をともなう旅」，「能動的な旅」を travel，ツーリストによる 20 世紀以降の「楽しみ旅」を tourism とすると，19 世紀の旅はその中間にあり「表現のできない旅」である．19 世紀の旅と旅する人をヴォワイヤージュ，ヴォワイヤジュールと名付け，それ以前の旅(Travel)ともそれ以後の旅(Tourism)とも異なる旅とする．事例研究として，シャトーブリアンの『パリからエルサレムの行程』，スタンダール『ある旅行者の手記』，フロベールの『ブルターニュ旅行記』，『エジプト旅行記』を用い，彼らはどのような旅の主体であったのか，旅の経験をしたのか，また，旅は文学作品や社会へどのような影響を及ぼしたのか，これらについて明らかにする．

論文の構成

本論文は全 8 章で構成される．第 1 章では，研究の背景と目的，第 2 章では Voyageur(Traveler)から Touriste(Tourist)に関するディスクールについて言語学的考察，社会学的考察を行う．第 3 章においては本研究の分析対象である「旅行記」というジャンルについて先行研究から省察する，続く第 4 章では，文化潮流「ロマン主義」について考察を行

う．第 5 章から第 7 章までは事例研究を示し，第 8 章を結論とする．

第 2 章

アメリカでは「旅行者から観光者へ」の変化は 1950 年代始まり，この現象についてブーアスティンが著書『幻影の時代』*The Image* の中で「かつての旅行者と観光者」のアーキタイプ，つまりかつての旅行者は旅に本物を求めるが，観光者は「擬似イベント」で満足し，「真正性」を求めない旅人であると言及した．さらにこの言説を巡って，マキャーネル，コーエン，V. スミスの反論が展開され，観光研究として現在も応用されている．一方フランスでは，19 世紀，すでにツーリスト研究が行われていた．しかしそれは文学領域からの研究であった．1840 年代には「生理学」の中で「変わった存在」として取り上げられ，文学作品で批判，あるいはからかいの対象となった．アメリカが「現在ツーリスト」を対象として社会学からのアプローチを行ったのに対しフランスでは文学研究であったことが明らかになった．

第 3 章

シュポー(1977)は旅行記には実用的側面と娯楽的側面が存在すること，つまり旅行記の両義性を示した．17 世紀以前は実用的側面が重視されていたが，実用的な発見も，読者は娯楽的に楽しむようになった．

ル・ユナン(1987)は，旅行記の 2 つの領域，科学的言説と文学的言説を提示した．簡潔な文体で真実を伝える手段としての旅行記は「科学的言説」であり，ルネッサンス以降，旅行記に楽しみを求められて以降は，「文学的言説」が見られるようになった．しかし，19 世紀ロマン主義の時代になると，旅行記に必要とされるのが，「旅から得られた結果」ではなく，旅そのものになったと述べる．サンスー(2002)は旅を伝統的な旅とユモリスティックな旅(諧謔的な旅)に分類する．ユモリスティックな旅は，気ままで偶発的であり，まなざしは皮肉に満ちている. シャペルとバショーモンの『アンコース旅行記』(旅:1656,出版年:1663), スターンの『センチメンタル・ジャーニー』(1768)をあげる．

第 4 章

フランス古典時代(1660-1715)の風潮に「不動(sedentaire)」があり，旅への関心は低かった．しかし 19 世紀ロマン主義時代を迎えると風潮は旅への関心に変化した．「ロマン主義的まなざし」は，観光学において頻繁に応用されているが，ロマン主義にはそれぞれの国で固有の特徴がある．本章では，『19 世紀ラルース大辞典』のロマン主義の定義を基に，イギリス，ドイツのロマン主義と比較しながら，フランスの特徴を考察した．

フランスロマン主義の特徴として，「他所」への関心があるが文学も絵画も，「他所」とは「オリエント」であった．「オリエント」への興味は 19 世紀以前にもみられるが，ロマン主義時代，作家自身が，実際に「オリエント」を旅することが重要であった．

近年フランスでは，旅する作家をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールと呼ぶが，定義は曖昧である．ベルティ(2001)は，エクリヴァン・ツーリストという言葉を使用している．対象作家は，シャトーブリアン，ネルヴァル，スタンダール，フロベール等でありエクリヴァン・ヴォワイヤジュールが対象とする作家と重複する．Voyageur とツーリスト(Touriste)が曖昧に使われるように，「旅する作家」を表す単語も使用者の判断にまかされるのであろう．

第 5 章

本章において，研究対象の旅行記は『パリからエルサレムへの旅程』であるが，「ギリシャ」，「エルサレム」，「エジプト」の 3 章を分析し，シャトーブリアンはどのような旅をしたのか，どのような旅の主体であったのかについて省察を行った．シャトーブリアンは 1806 年にエルサレムに向け，つまりオリエントに向け旅立った．旅の方法は前近代的であり，陸路では馬車，海路では帆船を利用した旅であった．

【ギリシャ】

シャトーブリアンの関心は，古代ギリシャであり，ホメロスの世界であった．旅人の当然の行動として旅の思い出として，パルテノン神殿の大理石を持ちかえる．

【エルサレム】

シャトーブリアンは先祖の名誉回復のため，最後の十字軍となるべくエルサレムへと向かった．エルサレムはクライマックスであった．一方でガイドブック的な実用情報が満載であり，滞在費用の詳細が記述され，「科学的言説」が展開されていた．

【エジプト】

エジプトでは悪天候がつづき，領事による援助や保護を受けている特別な旅行者であっても，ピラミッド登攀を経験することができなかった．エルサレムでクライマックスを経験した後にもかかわらず，「エジプトが一番美しい国に見えた」という感想を残す．

シャトーブリアンの旅は，「イメージを探しに」という目的からは，Touriste 的な旅の主体を確認することができるが，旅の方法，経験からは伝統的な旅行者 Voyageur であった．

第 6 章

6 章では観光研究作品として，『ある旅行者の手記』を分析対象とした．原題 *Mémoire d'un touriste* は出版当時(1837)センセーショナルなものであった．初めて Touriste という名詞が書籍のタイトルとして使用されたのである．スタンダールのこの作品により，Touriste が一般名詞化したと言われる．実際は，ルイ・シモンが 1816 年にすでに旅行記のタイトルで使用していた．このタイトルに関する考察として，スタンダールは以前からシモンの文章を高く評価していること，『恋愛論』の序文をまるまるシモンの文章から引用している実績から(大岡, 1970)，筆者はシモンからの拝借の可能性を提言した．『恋愛論』の序文を書いたシモンと，1816 年のシモンを同一人物として言及し，「ツーリスト」に関する観光研究はこれま

で見当たらない．観光学と文学領域における研究がリンクしていないことが明らかになった．

スタンダールという旅の主体については，白井（2007）は，

「公用はさておいて，それは時には恋人や友人に会うためであったり，私的な用事のこともあったりしたが，楽しみのための旅行が多い．その点では，かれは生涯に渉って漫遊（ツーリスト）であったと言っても過言ではないだろう」（239）

と結論づける．

第 7 章

ブルターニュ旅行とオリエント旅行を対象にフロベールと旅について考察を行った．2 つの旅に共通することはデュ・カンという，フロベールの友人でありつつ，保護者でもあるような野心家の文学青年との二人旅であったことである．

フロベールの時代は，フランスの産業革命が始まり，「近代化」が急速に進められた時代である．とくに鉄道など交通インフラにおいては，それ以前の時代には見られなかった発展があった．ブルターニュ旅行では今日の旅につながる「旅の新しさ」に注目した．方法として「旅の理由」，「行動」，「宿泊方法」，「交通手段」等の分析を行った．

実際は周到に準備された旅ではあったが，旅行記では「気ままな楽しみの旅」を行う二人が描かれる．しかし憲兵に説明した「個人的な気晴らしのための徒歩旅行」は全く理解されず，フロベールは「（気晴らしのための旅は）信じがたい，馬鹿げたことに思われたのだ」と記述するほどであった．エジプト旅行では娼婦との一夜の描写に代表される「楽しみの旅」の側面と，帰国直後に執筆した『ボヴァリー夫人』に見られる「旅」が作品に与えた影響を考察した．

第 8 章

筆者が作成した旅行記の変遷や作家の旅を示した年表は，1830 年代と 40 年代に旅の増加を如実に表している．旅行記も大量に出版されていることから，旅と作家の関係はそれ以前より緊密なったと言えよう．フランスの近代観光史の一要素として「ロマン主義作家の旅」を位置づける．彼らの旅行記からは，とりわけ交通手段の変化が見られた．シャトーブリアンの馬車や帆船の旅から，フロベールの鉄道，蒸気船を使った旅へと変化している．彼らに共通するのは，自分のための「楽しみの旅」を求めたことであろう．楽しみのために能動的に行動する旅の主体が確認できた．新聞やガイドブック等のメディアの発達もこの時代の特徴である．しかし，ロマン主義作家たちはブルジョワ階級に属している人々であったことは考慮すべきである．序論においてこの 19 世紀の旅をヴォワイヤジュールと名付けたが，その特徴は過渡的な旅であり，近代化はするが大衆化はしていない旅，その主体は traveler と Tourist(e)の両義性をもつ旅行者であり，それはロマン主義作家の旅に代表されると定義し，結論とした．

Ⅱ　論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本申請論文の重要な貢献は、文学研究分野において、観光研究に関連する諸研究がすでに行われていることを、幅広く先行研究を渉猟し、示したことにある。歴史学のみならず、文学研究が、現代観光研究の前提として存在したことは、特に本論文の対象となるフランスにおいて顕著だったことがわかる。文学研究においては、通常一作家のみ取り上げることが常套で、文化思潮全体について、本論文のように三作家を取り上げて分析することは稀である。インターディシプリンの観光学ならではの研究成果と評価された。文学領域だけでなく、観光学に関連する他の分野の成果についても踏まえていることも確認した。特にシャトーブリアンについては、日本でフランス本国ほどの評価が与えられていないこともあり、対象作品が未訳で原文に当たって考察せざるを得なかった。こうした本邦初訳の文学作品や観光関連文献の紹介も評価したい。

（２）論文の評価

最終的に補足修正された記述もあるが、序章で示した問について、本論を踏まえ、最終章で解を示してはいるものの、注意深い読解が必要なきらいはあるが、それをおいても観光文学研究として初めての学位論文である本申請論文は、上記特徴の通り、高い独自性を有していると、審査委員会は判断した。